

n-1 次元からの発想

西山豊

「あなたの特技は何ですか」と聞かれると、私は「視力が2.0です」と冗談っぽく言うことがある。暗やみでマンガ本をよく読んだが視力は落ちなかった。老眼が始まるまで一度もメガネのお世話になったことはない。ただ、やっかいなことがひとつあった。それは匂いがなくなることだ。20代なかばに突然の病に倒れたとき匂いがなくなったのである。病床上で意識が回復し、運ばれてくるカレーライスを見て、「ああ、嗅覚が切れたのだな」と気づいた。

ガスの心配をした。しかし、それはあまり気にならなかった。ガスの音で判断できるからだ。嗅覚がなくなると不便なものである。ソースと醤油の区別がつけられず困った。ラベルが貼られていない時は特に困った。匂いを除いてソースと醤油を区別する方法は？ 色、光沢、ねばり、注ぐときの音、容器の形、その他の情報で類推しなければならない。

こういうことで、身の回りのことを以前にまして注意深く見るようになった。私が数学そのものから離れ、日常生活に起きる些細な変化や現象にことさら気をとめ、これらを研究テーマにするようになったのは、嗅覚がなくなったことと関係があるのかもしれない。

私たちは3次元空間に住んでいる。時間軸を加えて4次元空間にいるともいう。一方、私たち人間には五感というものがあり、視・聴・嗅・味・触覚の感覚器官を持っている。これらもそれぞれ次元を持っているとすれば、9次元の世界になる。また、「君の考えは次元が低いよ」と会話するように、価値観も次元に加え、価値の多様化などを考え、これら全体を次元の中にひっくるめると、まさにn次元の世界にいるということになる。私はn次元の世界にいな

がら、匂いの次元を失ったn-1次元の世界しか感じ取ることができない。匂いのない世界から、匂いのある世界をみるとき、不思議と違った世界が見えてくるものだ。

メビウス(1790-1868)は帯状の長方形の片方を180度ひねり、他方の端に貼り合わせたメビウスの帯を考案した。2次元平面上に住む住人はその裏側へ行くことができないが、メビウスの帯の上なら裏側へ行くことができる。3次元の世界から4次元の世界を考えるひとつのヒントになっている。ポントリヤーギン(1908-1988)は14歳のときの爆発事故により失明するが、連続群論など多くの数学的業績を残している。ベートーベン(1770-1827)は20代後半からの難聴が悪化し晩年の約10年はほとんど聴こえない状態に陥るが多くの交響曲を書き上げている……

こんなことを考えていたとき、全盲のピアニスト辻井伸行さんがバン・クライバーン国際ピアノコンクールで優勝するというニュースが流れた(2009年6月7日)。辻井さんは生れたときから全盲だったが、音の感覚が敏感で、ピアノの多彩な音色にひかれて、4歳から本格的に習い始めたという。何よりも楽譜が読めないの、すべてを暗記するしか方法がなかったという。楽譜を見る必要がないから、さらに高度な表現に能力を発揮できる。障害を持つ人々はさまざまなハンディーを持たれているが、健常人と逆転することができるということの一例である。

現代の私たちは、パソコン、携帯電話など電子機器があふれ、欲しいものは何でも手に入るという満たされた生活を享受している。しかし、視点を変えて、何か不自由なものがひとつあるとき、つまりn-1次元の世界からn次元の世界を想像するとき、新しい何かを創造できるかもしれない。

(にしやまゆたか／大阪経済大学)